

アブラガヤ

Scirpus wichurae

カヤツリグサ科

名前の由来

小穂が熟すと油漬けしたような茶褐色になり、また、花序や葉鞘（葉のつけ根の鞘状になっている部分）に油をぬったような照りがあることから名付けられた。人によっては、草の臭いが油に似ていると感じる人もいる。
漢字名：油茅



アブラガヤ

形態的特徴

湿った陸地～浅い止水域に生育する湿生植物。高さ100～120cm、茎から幅1cm程度、長さ30cm程度の細長い葉を出す。葉はやや硬めでつやがあり、中心に明瞭な筋が入っている。茎の先端に大きな花序をつける。花序は多数に枝分かかれし、先端に小穂といて、小さな花がたくさんあつまつた、まるで実のように見える器官を2～3個つける。小穂の大きさは3mm内外で、丸みの強い楕円形をしている。色は初めは淡い緑色、花が終わって実が熟すと茶褐色になる。小穂を

よく見ると（ルーペがあると良い）、楕円形をした薄い鱗片状のものが多数あり、その鱗片一枚一枚の中に花の時期なら雄しべと雌しべ、実の時期なら実が一粒入っている。



アブラガヤの花序

類似種と見分け方

ツルアブラガヤ、同じカヤツリグサ科の植物。アブラガヤの小穂は楕円形をしているのに対し、ツルアブラガヤはアブラガヤよりやや細く、小穂の先端がとがる。また、ツルアブラガヤは茎が伸びて倒れ、その倒れた茎から新しい苗が生じて広がる。

枚の緑色の葉のようなものに包まれている。イグサ科は多くの種で茎の断面が円形または平たく、中は組織がつまっております。花序が枝分かかれた先には1～数個の小さな花をつける。カヤツリグサ科、イネ科と違って複数の花が集まってひとつの小穂をつくることはない。

カヤツリグサ科の植物は日本に約400種、十勝川流域で約50種が確認されており、いずれも細長い葉と緑色～褐色の目立たない穂状の花をつける。種類を見分けるには小穂、鱗片、雄しべや雌しべ、実、葉の形やつき方、根元の色味や形状、生えている場所の環境などに着目するが、難しいことが多い。



類似種のカヤツリグサ科、オニナルコスゲ



類似種のカヤツリグサ科、オオカサスゲ

水辺や湿地、河川敷には細長い葉をつけた植物が多いが、ミクリ科（144p）・ガマ科（146p）を除けばたいがいカヤツリグサ科・イネ科・イグサ科のいずれかの植物である。区別は比較的簡単で、カヤツリグサ科は多くの種で茎の断面が三角形、中は組織がつまっております。花序が枝分かかれた先に小穂をつけ、雄しべと雌しべの外側に一枚の鱗片がある。イネ科は多くの種で茎の断面が円形、中は空洞で、花序が枝分かかれた先に小穂をつけ、雄しべと雌しべは2



類似種のカヤツリグサ科、オオカサスゲ

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
開花期				■								
結実期					■							

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

（在来種）
草花

（外来種）
草花

哺乳類

（水辺）
鳥類

（草原・樹林）
ワシ・タカ

生育環境・分布

日向の湿地に生育する。しばしば群生する。

分布：国外分布は、朝鮮半島、中国、シベリア南東部に分布する。

国内分布は、北海道から九州に分布する。

道内分布は、全道的に分布する。

十勝地方生育状況は、河川敷の湿地や、止水域の水際などで見ることができる。しばしば群生する。



水域周辺に群生するカヤツリグサ科の植物

生活史

開花時期：7～8月

開花までの年数：不明

寿命：多年草

他生物との関わり

アオイトトンボは、アブラガヤなどのカヤツリグサ科植物やイ（イグサ科）、ヨシ（イネ科）など抽水植物の組織内に産卵し、生みつけられた卵は植物組織の中で越冬し、翌春孵化し、夏までの間に羽化する。

水生昆虫のエグリトビケラ類の中には、カヤツリグサ科植物など水中から突き出した葉の上に産卵する種類がある。葉の上に産みつけられた卵は、孵化したあと、降雨時に雨とともに水中に落下し、水中で成長する。



カヤツリグサ科の植物に産卵するアオイトトンボ



カヤツリグサ科の植物に産卵されたエグリトビケラ類の卵塊

興味深い話

■葉だけだと、他のカヤツリグサ科の仲間と区別するのが難しいが、アブラガヤの実が熟して、茶褐色に変化し、油をぬったような照りがでてくると、他のカヤツリグサ科植物との区別がかなりしやすくなる。

■アブラガヤの小穂の付き方や形には変異が多く、それによってエゾアブラガヤ、シデアブラガヤ、アイバソウに分けられる場合もある。ちなみにアイバソウとは、馬が好んで食べることから由来しているというが、さだかではない。

■カヤツリグサ科には広く“スゲ”と呼ばれる種群がある。分類学的にカヤツリグサ科スゲ属にあたる種群（アブラガヤはホタルイ属）で、種類が多く、高山から海岸までいたるところでその環境に適したスゲが生育している。特に水辺や湿地では、ヨシやマコモなどの湿生イネ科植物とともに水辺や湿地の植生を構成する主要な種群である。水域の浅い場所や水際に近い湿った陸地にしばしば群生する。

■十勝川の河川敷の湿地でよく見られるスゲは、オオカサ

スゲ、オニナルコスゲ、ヤラメスゲなど。湿った草地ではカサスゲ、ピロードスゲなど。

■スゲのうち、特にカサスゲは人と関わりの深い植物のひとつで、昔、菅笠や蓑（みの）をつくるために栽培したことからカサスゲと名づけられた。

■カヤツリグサ科の多くは、茎が硬く三角形をしているが例外もある。湖沼でよく見かけるフトイ（太藪）は、アブラガヤとは極めて近い種（同じホタルイ属）であるにもかかわらず、茎が柔らかく丸い。このように、分類的には近い種であっても姿や性質が全く異なるものも多々ある。



フトイ。アブラガヤと同じカヤツリグサ科、ホタルイ属

配慮事項

アブラガヤをはじめとする湿生のカヤツリグサ科植物は、湿った陸地から水際、水域では水深30cm程度の浅い水域までが主要な生育範囲である。カヤツリグサ科植物が茂る湿

地や水辺はトンボ類や両生類、魚類にとっても重要な生息場所である。

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

（在来種）
草花

（外来種）
草花

哺乳類

（水辺）
鳥類

（草原・
タカ）
鳥類
樹林

参考文献

「日本の野生植物 草本Ⅰ」佐竹義輔・大井次三郎 他 平凡社 1982

「北海道植物図譜」滝田謙譲 自費出版 2001

「野草の名前 秋冬」高橋勝雄 山と溪谷社 2003

「原色日本トンボ幼虫・成虫大図鑑」杉村光俊・石田昇三・小島圭三・石田勝義・青木典司 北海道大学図書刊行会 1999